

〈翻 訳〉

ジョアシャン・デュ・ベレー

『哀 惜 詩 集』(1)

田 中 聡 子

訳者による作品の紹介

この作品は十六世紀のフランスの詩人ジョアシャン・デュ・ベレーがローマ滞在中に書いたもののほか、帰国の旅にあって書いたものと帰国後に書いたものを加えた合計百九十一篇のソネをまとめたものである。近代の作品と異なり多少の予備知識が作品の理解を助けるものと思われるのではじめに簡単な紹介をしておきたい。デュ・ベレーは1547年頃からその友でありプレイアード派の代表的詩人であるロンサールと共にギリシャ、ローマの文学の研究を始めた。まもなく1549年には彼の名でこの詩派の宣言書ともいべき『フランス語の擁護と顕揚』(以下『擁護と顕揚』と略す)という作品を発表して、フランス詩をもりたてて古代文学の高みにまで引き上げようとする詩の革新者としての名乗りをあげたのである。彼らの自負するところは、すぐれた詩によって後世に永遠の名声を残す不滅の詩人たることであった。アポロンまたはミューズの恩寵による聖なる狂気(詩的靈感)という観念を導入し、詩人を神々と人間とを結ぶ媒介とする一種の神秘思想にまでやがて行きつくことになる。このように聖性を与えられた詩人を現実の生において支えるものは国王や有力貴族の保護・寵遇をおいてはない。理念の上ではスーパーヒーローのような詩人も、実際の創作にあたっては、国王や名士に讃辞を捧げ、詩によって相手の名声を後世に伝えることを約束しつつその保護を求めるのである。デュ・ベレーについて言えば、当時アンリ二世の外交官として対教皇政策にあたったデュ・ベレー

枢機卿の血縁という名門の出自を誇るとはいえ、彼自身は没落した家の孤児として現実的な基盤を持たぬ身の上であった。世すぎのためには彼としてはこの枢機卿に頼るほかはなく、1553年枢機卿が国王の特使としてローマに赴任する際その秘書として随行した。ローマで彼は枢機卿の家の執事のような役割を与えられ、財政面での煩わしい仕事に従事した。その期間が三年を過ぎる頃、詩人の心にはさまざまな迷いが生じてくる。詩人として名を成すためには故国で宮廷の近くにあつて人々の口に上る作品を書き写さなければならない。現在の生活は詩人の天性とはあい容れぬものであり、その果てに何が待っているかを思う時詩人は不安と悔恨を覚えずにはいられない。こうした不安、郷愁、悔恨、ま近で見聞きしたローマの風俗に対する批判といったものがこの『哀惜詩集』のテーマとなっている。デュ・ベレーは自らを追放されたローマの詩人オウィディウスに擬してこの作品を書いている。ミューズの恩寵が宮廷の保護や人々の喝采と結びついたものであるからには、デュ・ベレーはオウィディウスと同様に世界の中心から追放された身の上である。こうして書かれたこの作品は、デビュー当時の彼が気負って書いたペトラルカ風恋愛詩(『オリーブ』)などと比べるとその独特な性格が明らかとなる。デュ・ベレーはそれまで恋愛詩と結びつけられていたソネを用い、ペトラルキスムの常套的な技法を意識的に用いながらそのテーマをすりかえて全く違った感情をこの作品では歌っているのである。そのテーマの故に詩人はこの作品を当時の価値観からして一段低いジャンル、諷刺詩のジャンルに位置づけている。またミューズの恩寵たる詩的靈感に導かれての詩作ということも否定している。それでいて一方ではこの作品の質についてどうやら大いに自負しているようである。ともあれ訳者はこの作品が最もデュ・ベレーの本領を發揮したものであると考えている。名声や作品の豊穡さでロンサールに及ばなかったデュ・ベレーはこの作品で独自の地位を自分のものとしたのである。

尚テキストについてはスクリーチ版を使用した。Joachim du Bellay, *Les Regrets et autres oeuvres poétiques*. Texte établi par J. Jolliffe. Introduit et commenté par M. A. Screech. Genève, Droz,

1966.

読 者 に⁽¹⁾

読者よ、君に捧げるこの書物は
 胆汁と密と⁽²⁾を共に含み、
 さらには塩をも混ぜたる味を持つ。
 君の口に快しとあらば
 君と食事を共にせん。この晚餐は君のため
 用意されたり。不足とあらば去り給え。
 君をこの晚餐に招くこと願わざれば。

註

- (1) この詩のみラテン語で書かれている。
 (2) 胆汁と密については、半ば格言ともなっているユウェナーリスの次の詩句に拠っている。≪ plus aloes quam mellis habet. ≫ここで詩人はこの作品が諷刺詩であることを予告しているのである。

枢密院顧問アヴァンソン殿⁽¹⁾に

もしも私の上にもはやミューズの寵がなく、
 また私の詩が出来ないものであるとしても、
 それを書いた場所と時代と年齢とが、
 また私の心痛がその言訳となるだろう⁽²⁾。
 戦いのただ中に私はローマに在り⁽³⁾、
 快活な年頃はとっくに過ぎ去って⁽⁴⁾、
 ひたすら休らぎをのみ私は詩に求めた。
 賞讃も君寵もそれが為に求めはしなかった。
 ちょうど平原に牛を追う者が、
 あるいはまた砦を守る兵士が、
 自らの慰めに拙ない詩の一篇を
 苦心惨たんの末書きあげるように。

同様にまたガレー船に乗り、
波をかきわけて漕ぐ人が
櫂にあわせて悲しい歌をうたうのは
苦役を少しでも軽くするため。
伝えによればアキレウスも、怒りを抑え、
愛する女の悲しい思い出を
リュウラ^{リュウラ}の調べでやわらげようと、
こうした楽しみにふけていたとか。
またかつてトラキアの^{ヘーア}堅琴を
岩にも森にも聞かせた人⁽⁵⁾も同様に
二度までも失なった妻への思いを
そうやって慰めていたという。
ミューズはちょうどそんな風に
流浪の私がわが家を慕うこの岸辺で
辛い季節の憂さを晴らしてくれる。
こんなにも長い旅の唯一人の友として。
ミューズだけは戦いのさ中であって
惑うこともなく恐れに青ざめることもない。
ミューズだけは苦役のただ中であって
苦痛をなだめ涙を乾かしてくれる。
彼女から私は休息といのちを受けとり、
彼女から私は野心を去ることを学ぶ。
彼女から私は神々の貴い贈り物⁽⁶⁾をもらう。
また財を求め人を妬むことへの軽蔑をも。
子供の頃から私の楽しみを見守り、
導いてくれた彼女にはわかっているのだ、
欲得づくではない、義務だけが
こんなにも長く私を故国から遠ざけているのを。
思いもよらぬ、(ミューズに従おうにも、

私の背には貧しさがあまりに重いから)
九人の姉妹の足跡を私の道と定めて
メドゥーサの泉⁽⁷⁾を見にいこうとは。
だがどうやって彼女らを逃れようか、
だまし上手なその歌声は私の心をあざむき、
彼女らの仕掛けた罠は
私の翼をやさしく捕えてしまった。
ちょうどこんな風に快い力によって
オデュッセウスの仲間らは自由を奪われ
仕事に戻ることも忘れて
誘惑の果実をむさぼったのだ。
惚れ薬の甘く苦い毒⁽⁸⁾を
分別もなく飲んでしまった者は
災いと知りながらその災いを愛し、
奴隷の鎖に甘んじるほかはない。
だから私は好きだ、やさしい詩が、
私を傷つけたこのやさしい矢が⁽⁹⁾。
乳呑児のうちにもうミューズは
私の心にこの甘い餌を残していった。
我々の魂が持つ聖らかな神性を
人が狂気と呼ぼうとかまいはしない。
それでもこうした錯乱がかくもやさしく
我々を捕えているのは無駄ではない。
それのお陰で思考の目が眩まされ、
わが身の不幸を時には見ないですむからだ。
夜も昼も私を苛む苦しみに
それは甘美な魔法をかける。
イデ山中を叫びまわる
ぶどう酒に汚れた巫女たちも
バツユス
酒神の杖の痛みを覚えない。

だから私もこの身の不幸を感じない。
人は言おう、こんな繰り言が何になると。
木から果実が生まれるように、
私の苦しみから生まれた果実は
偽りのない涙とため息だ。
人は皆何かしら不幸を訴える。
ただその方法はさまざまだ。
この私は詩を選んだ。
心の痛みをなだめるすべとして。
だから私は柔かい諷刺のとげを
花々の間にそれとなく置いて、
泣き言で人をうんざりさせないよう、
何よりも笑いをここに用意する。
この詩が賞められるものなのか
あるいは咎めを受けるものかは
ただ閣下お一人の御心にゆだねて。
ほかならぬ閣下にこそこの書物を捧げる故に。
閣下こそは叡智をもって
法と公正とを結びつけられたお方、
またはるかに遠い昔より
貴族の名と美德の実をあわせ持つお方。
閣下は常日頃守っておられる、
ご自身で始められた長い慣習を。
助言とペンがいかに役立つかを
賢明にもよくご存じのお方として。
だからこそあの英明にして勇氣ある陛下が
閣下に大使の栄誉を授け給い、
陛下の栄光を異国の地にももたらさんと
閣下の背にそれを担わせ給うたのだ。

閣下の功に高き地位をもって報い、
 積年の働きへのこの報いにより
 陛下は示し給うた、
 いかにその働きが御心になうかを。
 願わくはこの書が閣下の御心になわんことを。
 真心よりこれを閣下に捧げるが故に。
 そしる者達のことは気に掛けるまい。
 信じよう、後の世に長く生きんことを⁽⁹⁾。

註

- (1) Jean de Saint-marcel, seigneur d' Avanson. ローマ駐在大使で、詩人の友人マニー（後出）の雇い主でもある。
- (2) ここはオウィディウスの次の詩句に拠っている。≪ Siquea meis fuerint, ut vitiosa libellis, excusata suo tempore, lector, habe. exul eram requiesque mihi, non fama, petita est, … ≫ [Ovidius, *Tristia*, IV, I, 1～3]
 尚この詩句以下72行目までは、同じくオウィディウスのこの作品の上記引用部分以下48行目までを基として、個々のモチーフをほぼ忠実に追いながら、デュ・ベレー自身のイメージでふくらませたもので自由な翻案となっているが、長くなるので引用は省くことにする。
- (3) 詩人は1553年から1557年にかけてデュ・ベレー枢機卿の秘書としてローマに滞在した。この時代も先代のフランソワ一世の時代に引き続きフランスとスペイン・オーストリアのハプスブルグ家がイタリアにおける覇権を争っていた。この争いは幾度も結ばれては破られる休戦条約をはさみながら続けられ、教皇は対立する二大国のどちらかと手を結んではまた離れつつイタリアをどちら側の支配からも自由にしようとする政策をとり続けていた。二大国間の力関係が変化したり教皇が交替したりする度にイタリアと両国との関係はゆれ動く。詩人はローマ滞在中に教皇の交替を二度も見聞している。またこの時代の戦争についていえば、フランソワ一世の晩年に結ばれた1544年のクレピの和平の後、1547年に即位したアンリ二世は1552年スペインに反抗するシエナ人に加勢して出兵し再び戦端が開かれた。この戦争は北方での戦いとも平行しつつ1554年スペイン軍によるシエナの包囲、1555年シエナの降服と続き、1556年ヴォセルの休戦条約によって一応の結着を見る。しかし1557年初頭には再び戦争が開始されるのである。デュ・ベレー枢機卿は教皇をフランス側につけんとする国策に沿って特使としてローマに派遣され、莫大な費用をかけて外交政策を展開していたが、詩人はこの枢機卿の家の財政上の管理に頭を悩ます多忙

な生活を送っていた。

- (4) 詩人の生年は確実ではないが1522年とされている。とするとこの作品を書き始めたと思われる1555年ないし1556年には三十代の半ばに達しようという年頃である。
- (5) オルペウス
- (6) 神々の贈り物は眼りをさしている。
- (7) ヒッポクレネー（馬の泉）。メドゥーサの血から生まれた神馬ペガソスがヘリコン山を蹴った時この泉が湧き出した。この山でミューズ達が詩の競技を行なったところあまりの楽しさに山がふくれ上り天まで届くばかりとなったためゼウスの命でペガソスが山を蹴りもとの大きさに戻したのである。ここからこの泉はミューズのシンボルとされている。
- (8) *poison doux-amer, doux traict par qui je fus blessé*. これはペトラルキスムの特徴である撞着語法 *alliance de mots* になっている。
- (9) 後世における不滅は当時の常套的テーマであった。

己が書に

わが書よ（お前の自由を妬むのではないが）
 お前一人はわが陛下の宮廷を見にも行けよう⁽¹⁾。
 不幸な私にはどれほどうれしいことだろう、
 お前と同じ幸せがこの目に許されるものならば。
 もしも誰かがお前にやさしくしてくれたなら
 自分の土地で幸せに暮せるよう祈ってやるがいい⁽²⁾。
 またもしお前を陰でそしる腹黒い者がいたら、
 彼にはお前の涙と私の不幸せを祈るがいい。
 祈ってやるのだ、長い旅の空にあって、
 遠い自分の家を見ることもできないのに、
 思いばかりがそこから離れないでいるように。
 祈るがいい、長い宮仕えに空しく年を取り、
 ついには全くの忘恩に報いられることを。
 留守中に人には家財を食い潰されることを⁽³⁾。

註

(1) ここはオウィディウスの次の詩句に拠る。

≪ Parve (nec invideo) sine me, liber, ibis in urbem. ≫ [Tristia I, I, 1]

- (2) オウィディウスにあっては、書物自体が語り手となってローマ市で出会った親切な人のために祈る形式になっている。≪ di tibi dent, nostro quod non tribuere poetae, molliter in patria vivere posse tua. ≫ [Tristia III, I, 23~24]
- (3) 詩人は自身にオデュッセウスのイメージを与えている。トロイア戦争からなかなか戻らないオデュッセウスの故郷では彼の死を主張する求婚者達が妻ペーネロペーに結婚を迫り勝手に館に滞在して飲み食いしていたが、デュ・ベレーにもいくらか似通った事情があった。かねてから彼は兄の遺児の後見人として厄介な相続問題の争いにまきこまれていたが、その裁判はローマ滞在中も続いており、しかも詩人にとっては不利な展開を見せていた。

ソ ネ 1

自然の胎内を探ろうとは思わぬ、
 宇宙の霊を求めようとも思わぬ、
 秘められた謎を解くなど思いもよらぬ、
 また見事な天の建物を描いてみようとも⁽¹⁾。
 私の絵にはそんなに豪華な色彩はいらない。
 私の詩にはそんなに高尚な主題はいらない。
 ただこの土地のさまざまな出来事を
 良いも悪いも手当り次第に描くばかりだ。
 帰らぬものを思う時には詩にむかって泣き、
 詩と共に笑い、詩に秘密をうちあける。
 私の心の最も誠実な友として。
 だからこの詩に櫛を入れ髪縮らせるなど思いもよらぬ⁽²⁾。
 りっぱな名前で体裁を整えることも望みはせぬ。
 ただ毎日の記録とも回想録とも呼べばいい。

註

- (1) ここで詩人は高いジャンルのテーマを捨ててより低いジャンルのテーマを選ぶことを明らかにしている。高いジャンルの詩は、神々によって靈感を与えられた真の詩人だけが垣間見ることの出来る真実、宇宙を支配する法則、いわば神々の秘密を

詩的虚構によって万人に示すことのできるようなものである。この点について詩人は『詩に関する国王への論説詩』 *Discours au roy sur la poesie* (1560年出版) と題する詩の中で歴史と詩を比較して次のように書いている。

「歴史家はいかなる虚構をも用いることなく個々の行為のあるがままを語る。

(中略)

詩人はより大胆に無限の技を駆使して

多くの虚構の下に真実を隠しておく。

ちょうど大胆なねらいを持つ画家が

戦場や陥落した町や嵐や戦闘を描き、

また神々さえも人間の姿で描いて

我々の目に見せてくれるように。

前者には、陛下、ジャネがこれに当り、

後者にはミケランジェロが挙げられよう。」(ジャマール版第六巻164~165頁)

従ってこのソネの最後の行で詩人がこの作品に日記や回想録の名を与えているのは、彼がこの作品を詩よりもむしろ歴史として位置づけていることを示している。

またロンサールは1565年の『フランス詩法概要』 *Abbrégé de l'Art poétique françois* の中で次のようにのべている。「詩はそもそもの初めにおいては楽しく潤色された寓話によって粗野な人々の頭に諸々の秘密を理解させるための寓意神学にほかならなかった。」(ローモニエ版第十四巻4頁) また次のようにも言っている。

「神託がごくわずかな言葉で示したことをこれらの高貴な人々(詩人——訳者註)はふくらませ、色どりを与え、言葉を増して、巫女や占者が詩人に対して占めた位置を民衆に対して占めたのである。」(同書5頁) 尚歴史家と詩人の具体例として二人の画家ジャネとミケランジェロを挙げているがこれについてはソネ21の訳註を見られたい。

- (2) オウィディウスには次のような詩句がある。◀*nec fragili geminae poliantur pumice frontes, hirsutus sparsis ut videre comis.*▶ [*Tristia*, I, I, 11-12.]

ソネ 2

私よりも知にすぐれた人は(パスカル⁽¹⁾よ)

アスクラ人⁽²⁾と共に二つの峰持つ山⁽³⁾で夢見もしよう。

より高い世間の評価を受けるために

馬の泉⁽⁴⁾の底深く裸かで潜りもするだろう。

この私は一行の詩句を長くするために

脳髓を縮めたいとは、また詩に磨きをかけるため

念入りにやすりで頭をすり減らし、
 机を叩き爪を噛みたいとは思わぬ⁽⁵⁾。
 私の望みは(パスカルよ)私の作品が
 詩による散文、さもなくば散文による詩であることだ⁽⁶⁾。
 これが為に桂冠の栄を得ようとはさらに思わぬ。
 だが恐らくは自らの技に自信のある者が
 私の詩をかくも易しい調べとあなどり
 真似ようとしても徒らに骨折るだけに終るだろう⁽⁷⁾。

註

- (1) Pierre de Pascal (1522—1565). 修史官。
- (2) アスクラ生れの詩人ヘーシオドス。
- (3) パルナソス山。ふもとにアポロンを祭るデルポイの神殿がある。
- (4) ヒッポクレネー。前出。
- (5) ここはホラチウスに拠っている。≪……et in versu faciendo, saepe caput scaberet, vivo et roderet unguis. ≫ [Horatius, *Satirae*, I, X, 70~71]
- (6) ここでもジャンルが問題になっているのである。この詩句は詩的寓意を内容としない詩は詩よりむしろ散文に近いとする考え方を基にしている。この作品は十二音綴によるソネから成っているが、当時十二音綴はあまりに冗慢で散文の匂いがするとされ、高尚な主題には八音綴か十音綴がよいとされた。またここでデュ・ベレーはホラチウスを見習っている。≪ primum ego me illorum, dederim quibus esse poetas, excerptam numero: neque enim concludere versum dixeris esse satis; neque, si qui scribat uti nos sermoni propria, putes hunc esse poetam. ≫ [Horatius, *Satirae*, I, IV, 39~42]
- (7) ここもホラチウスに拠っている。≪ ex noto fictum sequar, ut sibi quibus speret idem, sudet multum frustra labaret ausus idem. ≫ [Horatius, *Ars poetica*, 240~242]

ソネ 3

かってはまだ私も運命のいたずらで
 これほどの災いに苦しむこともなかったから、
 人の通わぬアポロンの道をひたすら辿ったものだった。

聖なる狂気⁽¹⁾に神々しくも駆りたてられて。
 今ではもうあの神性を身内に感ずることもなく
 その代りしつこい不安につきまといわれて
 ぬきさしならぬ窮乏の身にふさわしく
 はるかに楽な生き方を私は選んだ。
 それ故（閣下）美神の野に分け入って
 ロンサールが進んだ道⁽²⁾はもう見分けもつかず、
 踏みならされた道の方へ私は足を向ける。
 彼のように汗を流し骨を折って
 美德に至る険しい道を迎えるだけの
 勇気も力もまた気力も私にはないのだから。

註

- (1) *sainte fureur*. これはネオ・プラトニズムに由来する用語で詩人の聖性を語るためによく用いられている。
- (2) ここで引きあいに出されているロンサールは1552年の『ミシェル・ド・ロピタルへのオード』 *Ode à Michel de L'Hospital* でアポロン・ミューズに靈感を与えられた真の詩人について歌っているがその書き出しが「美神の野をさまよいながら……」となっている。（ローモニエ版第三巻）

ソネ 4

ギリシャの書物をひもところとは思わぬ⁽¹⁾、
 ホラチウスの見事な筆致をまねようとも、
 ましてペトラルカの優美をまねようとも。
 またロンサールの詩をまねてわが哀惜を歌おうとも。
 真の詩人と日の神⁽²⁾に認められている人々は
 はるかに大胆な力をその詩に吹きこむことだろう。
 より低い熱狂に駆りたてられているこの私は
 そんなに深く秘密の奥に踏み込みはしない。
 苦しみが私に語らせる、そのことだけを

飾り気なく描くことでこの私には満足だ。
 もっとまじめな題材をほかで探そうとは思わぬ。
 まして作品によって後の世によみがえり、
 生きて墓から現われると自称する人々を
 この作品⁽³⁾でまねようと思ったわけでは決してない。

註

- (1) 詩人は1549年の『擁護と顕揚』*La Deffence et Illustration de la Langue françoise*の中で、フランスの詩を高めるために古代人の作品を研究し模倣することを未来の詩人に勧めている。「それ故にまずはくり返し読むことだ(おお未来の詩人よ)、ギリシャとローマの書物を夜となく昼となくひもとくのだ。」〔第二巻四章冒頭。シャマール版107～108頁〕
- (2) Phoebus. ポイボス・アポロン、輝ける日の神アポロン。
- (3) 詩人はこの作品でと限定している。この作品で彼はオウィディウスのイメージを自分に与えているのであって、オウィディウスが流刑地で書いた作品のようにデュ・ベレーのこの作品も名声や野心から遠いところにあることを匂わせている。

ソ ネ 5⁽¹⁾

恋に身を焼く人々は己れの恋を歌うがいい。
 名誉を愛する人々は誉れについて歌うがいい。
 王の身近にある人は勝利を吹聴するがいい。
 宮仕えする人々はその寵遇を誇るがいい。
 学芸を愛する人々は知識をひけらかすがいい。
 徳ある人はそのように人にも信じさせるがいい。
 洒が好きなら気の向くまま洒の話を書くがいい。
 暇があるなら面白い作り話を書くがいい。
 陰口叩く人々は好んで悪口を書くがいい。
 それほど悪意のない人は笑えるものを書くがいい。
 もっと価値ある人々は己れの価値を誇るがいい。
 我とわが身がお好きなら自ら讃辞を書くがいい。
 迎合したい人々は悪魔を天使にもするがいい。

不幸であるこの私は私の不幸を嘆くとしよう。

註

- (1) このソネはペトラルカ風恋愛詩の常套的構成をとっているが、他の人々と対比して最後に持ち出される詩人のテーマは恋の苦悩ではなく、日常的・現実的な生活の苦しみとなっている点で価値の転倒がみられる。ペトラルキストにあっては至上のテーマである恋をこのソネでは第一行で捨て去っているのである。

ソネ 6

ああ、あの運命を悔る心は今どこにあるのか。
 どんな逆境にもうち勝ったあの勇氣は、
 不滅を願うあの汚れのない野心は、
 また凡夫の知らぬあの氣高い熱情⁽¹⁾は。
 夕暮れ、褐色の闇⁽²⁾の中でミューズらが私に許した
 あの甘美な喜びはどこにあるのか、あの頃は
 人気のない岸辺の草の上で彼女らを腕に抱き、
 月の光に照らされて踊ったことも幾たびか。
 今では運命が私の崇める女性となり、
 かつて己れのあるじであった私の心は
 今はこの身を苛む苦悩と痛恨の僕べとなってしまった。
 後の世のことはもう気にかかけもしない。
 あの聖なる熱情⁽³⁾ももう持ちあわせてはいない。
 ミューズらはよそ者であるこの私から逃げていく。

註

- (1) *honneste flamme*. 聖なる狂気 *sainte fureur* をさしている。
 (2) 褐色の闇は月の輝く明るい夜のことである。
 (3) *divine ardeur*. これも上記(1)と同じ。

ソネ 7

かつて宮廷で私の詩が読まれていたあの頃は、

また国王の妹君にして類いなきマルグリット⁽¹⁾が、
 この身に余る名誉ながらその美しくも神々しいまなざしを
 私の詩に注いで下さったあの頃は、
 精神の高揚が死をも歳月をもよせつけぬ翼で
 私を天の高みへと連れ去ったものだった。
 パルナソスの山上に住む博学な神々⁽²⁾も
 わが魂の火をこの上なき聖なる火でかきたてた。
 今では私は啞の身だ、まるでアポロンの巫女が、
 かつて主だった神の声を聞けなくなって、
 錯乱も予言の術も急に失くしてしまふように。
 王命を拝する喜びを感じない者がどこに居よう。
 名誉は学芸を養うもの、そしてミューズも、
 人々の喝采と君寵を求めるものなのだから⁽³⁾。

註

(1) Marguerite de France (1523—1574) アンリ二世の妹。

(2) ミューズ。

(3) オウィディウスには次の詩句がみられる。

<<denique non parvas animo dat gloria vires, et fecunda facit pectora
 laudis amor, nominis et famae quondam fulgore trahebar, dum tulit an-
 temnas aura secunda meas.>> [Tristia, V, XII, 37—40]

ソネ 8

驚くことはない、ロンサールよ、魂を分けあう友よ、
 君のデュ・ベレーがもうフランスで読まれないとしても、
 またイタリアの天から吹く風を吸っていながら、
 この国に燃える熱狂までは吸っていないとしても。
 君の貴婦人の麗しの眼から射す聖なる光、
 君のそして私の陛下の貴い御寵愛、
 それが(ロンサールよ)それが、それこそが、

君の心をかかも激しく燃えさからせるのだ。
 己が太陽⁽¹⁾の光を失ってしまったこの私に
 どうして同じ熱が感じられようか、
 聖なる火の真近にある人と同じ熱が。
 太陽の輝く岸边はぶどうの枝でおおわれる。
 だが極北の永遠の冬がもたらすものは
 ただ寒さと雪と細かい雨ばかり⁽²⁾。

註

- (1) マリグリットを指していると思われる。ソネ7参照。
 (2) オウィディウスはその流刑地トミス（黒海沿岸，現在のコンスタンツァ）の気候の厳しさを訴え，次のように歌っている。≪non hic pampinea dulcis latet uva sub umbra, nec cumulant altos fervida musta lacus.≫〔*Tristia*, III, X, 71~72〕

ソネ 9

フランスよ，学芸と武勇と法の母なる国よ，
 あなたは長い間私をその乳で育ててくれた。
 今私は母を求めて泣く子羊のように
 あなたの名を洞穴や森にひびかせている。
 かつて私をあなたの子供と呼んだのなら
 今はなぜ私に答えてはくれぬ，むごい人よ。
 フランスよ，フランスよ，私の悲しい声に答えよ。
 だが誰一人，笥以外に私に答える者はない。
 残忍な狼にまじって私は平野をさまよっている。
 冬の近づく音が聞こえる，その冷たい息に
 私の肌は総毛だちぶるぶるとふるえている。
 ああ，ほかの子羊達は草にこと欠くこともなく，
 狼にも風にも寒さにもおびえることはない。
 それでも私は群れの中で一番劣る息子ではない。

ソ ネ 10

そそり立つ岸边もつトスカナの流れ⁽¹⁾でもなく、
 ラテンの気風でもパラティヌスの丘でもない、
 母国の言葉を異国のそれにとり替えて、
 今私に(ロンサールよ)ラテン語を語らせる^{(1) bis}ものは。
 アヴェンティヌスの丘⁽²⁾につながれたプロメテウスの如く
 愛の絆ならぬみじめな希望とむごい運命とが
 私を奴隷の鎖につないだ年月が
 三年にもまたそれ以上にもなるためだ。
 何をいう(ロンサールよ)、異国ではオウィディウスさえも⁽³⁾、
 ラテン語を蛮夷の言葉にとり替えて
 理解を得ようとしたものを、誰が私を咎めよう。
 ほめられてよい取り替えを誰も咎める者はない。
 よし君がギリシャ人にもローマ人にも並ぶ者だとて、
 ラテンの岸边ではフランス語など通じることはないのだから。

註

(1) ティベリス河(テヴェレ河)。

(1) bis デュ・ベレーはローマでラテン語の作品も書いている。*Poemata* (1558年)。

(2) ローマの丘。

(3) オウィディウスには次の詩句がある。

≪ ipse mihi videar iam dedidicisse Latine: nam didici Getae Sarmaticeque loqui. ≫ [*Tristia*, V, XII, 57~58]

ソ ネ 11

アポロンの技は世の人の欲しがるものではないけれど、
 そんな富には守銭奴も目の色変えはしないけれど、
 そんな鎧は兵士にも必要のないものだけれど、
 野心もそうした名誉にはまるで興味はないけれど、

お偉方にはお笑い草に過ぎないものではあるけれど、
 世慣れた人ほどできるだけ遠くに逃げるものだけれど、
 どんなに詩人の生業が軽くみられているものか、
 このデュ・ベレーが十分な証となっはいるけれど、
 利のない芸が廷臣の気に入る筈はないけれど、
 詩など書いては大家さえ収入のあてはないけれど、
 ミューズの後には貧困が必ず従うものだけれど、
 それでも私は歌うのをやめたいなどとは思わない。
 詩だけが私の悲しみに魔法をかけてくれるから^①。
 また六年の歳月をミューズに負うているのだから。

註

- (1) このソネのテーマはペトラルカ風恋愛詩におなじみのものであるが、ただここでは詩によって魔法をかけられるのは恋の悲しみではない。

ソネ 12

私を悩ます数々の家事の苦勞を見たために、
 際限もなくつきまとう心配事を見たために、
 無念の思いのこれほどに積もっていくのを見たために、
 君は時折不思議がる、どうして私に歌えるのかと。
 私は歌わない（マニー^①よ）悲嘆の涙を流すのだ。
 それともむしろ泣きながら歌うといえはいいものか。
 歌うことで時折は悲嘆に魔法をかけるために。
 だから（マニーよ）私は歌う、昼も夜も、
 こんな具合に職人は彼の仕事をしながら歌い、
 こんな具合に労働者はその労働の中で歌い、
 こんな具合に旅人は遠いわが家をなつかしみ、
 こんな具合に従軍の兵は意中の女を思い、
 こんな具合に船乗りは櫂を操りつつ歌い、

こんな具合に囚人は獄舎を呪いつつ歌う。

註

- (1) Olivier de Magny (1529?~1561). ローマ大使アヴァンソン侯の秘書としてデュ・ベレー同様にローマに在った。彼もまたローマ滞在中のソネを集めた作品を出している。 *Les Soutirs*. (1557)

ソ ネ 13

今となっては許している、あの快い熱狂を。
 それのお陰で生涯の最良の時を浪費した。
 私の甲斐なき努力から生まれた果実は唯ひとつ、
 あれほど長い彷徨で空しく時を潰したこと。
 今となっては許している、あの楽しい骨折り⁽¹⁾ を。
 唯それだけで人生の嵐の中でありながら、
 昔のままに私は恐れにふるえることもない。
 詩が若き日の過ちであったとしてもそれはまた、
 わが老いた日の支えともなってくれるに違いない。
 それが狂気であったなら、今後は私の理性となり、
 それが痛手であったなら、わがアキレウス⁽²⁾ ともなるだろう。
 それが毒でもあったなら、それはまた効めあるさそり油⁽³⁾、
 私の担う苦しみの唯一の薬となるだろう。

註

- (1) *ce plaisant labeur*. これも撞着語法である。献辞の訳註(8)を参照されたい。
 (2) これは次の神話に基いている。テウトラーズを継いでミュージアの王となったテーレポスは第一回トロイア遠征の折彼の国に上陸したギリシャ軍と戦いアキレウスに傷つけられた。後に神託を聞き、アキレウスの槍の鏑だけが傷を癒すと知って交換条件を出して直してもらうのである。尚オウィディウスには次の詩句がある。
 ≪ *Forsitam ut quondam Teuthrantia regna tenenti, sic mihi res eadem vulnus opemque feret.* ≧ [*Tristia*, II, 19~21]

(3) scorpion utile. さそりの毒消しに用いるためさそりを潰けて殺した油。

ソネ 14

金貸しどもの催促にほとほと困っている時は、
 詩を書くことでさっぱりと心配事を追い払う。
 扱いにくい従僕に気分を悪くした時は、
 すぐさま（ブシェ⁽¹⁾よ）詩によって何とか気持を落ち着ける。
 人に怒りをぶつけられ罵声をあびたりした時は、
 心の毒を詩の中に今度は私が吐きすてる。
 私の弱い精神が仕事に疲れくじけても、
 詩があればこそ元気を出し再び仕事に向かうのだ。
 詩は私から柔弱な怠け心を追い払う。
 詩は私におだやかな自由を愛するようにさせる。
 詩は私に言えないことも私の代りに歌ってくれる。
 詩が私にこれほどの利益を与えてくれるのに、
 それでも言うのか（ブシェよ）詩が何になると。
 私の書いた作品にどんな利益があるのかと。

註

(1) Etienne Boucher. ローマ大使館付秘書。

ソネ 15

パンジャ⁽¹⁾よ、私の暇潰しがどんなものかを知りたいのか。
 私は明日の事を思い、出費について心配する。
 毎日それが嵩むのだ。しかも私には何としても、
 金も出さずに借金取りをなだめて帰す義務がある。
 行ったり来たり駆けたりと、時を無駄にはしていない。
 金貸しの気嫌をとり結び、金を前借りしてもくる。
 一つの件が片づけばまた別口の始まりだ。

したいと思う四半分もとてもやってはられない。
 人は私につきつける，付けに書状に覚え書を。
 また私は聞かされる，明日は枢機卿会議の日だと。
 ありとあらゆる問題で私の頭は割れそうだ。
 泣き言いう者，こぼす者，ぼそぼそ言う者，叫ぶ者。
 これだけ聞いても(パンジャよ)，言い給え，
 私にどうして詩が書けるか君は驚きはしないのか。

註

- (1) Panjat, Jean de Pardeillan. ローマにあってはアルマニャック枢機卿の秘書をつとめていた。

ソネ 16

マニーが彼の偉大なアヴァンソンに従い，
 パンジャは彼の，私は私の枢機卿に従っている間に，
 また人生の美しい時を貧る不実な希望が
 美味しい餌で我々の欲望を釣っている間に，
 君⁽¹⁾は王侯の気嫌をとり，人にすぐれた歌声で
 時代の誇り国王アンの治世を歌って，
 君の名をもまた君の博学な歌が讃えるお方の名をも
 二つながらに高めたが，陛下もまた君を敬い給うた。
 それにひきかえ我々は空しく時を潰している。
 遠い異国の見もしらぬこの岸边⁽²⁾で。
 ここでは不幸が我々に悲しい歌をうたわせる。
 まるで，死がその名を呼ぶ時に，
 はるかな池畔の真新しい草の中で
 身を寄せあって泣く三羽の白鳥のように⁽³⁾。

註

- (1) デュ・ベレーはロンサールに宛てている。ソネ17の訳註参照。

- (2) デュ・ベレーが身を置いているのは世界の都ローマであるが、彼にとってはこのローマがオウィディウスの流刑地にも等しい。
- (3) オウィディウスにもこの白鳥との比較がみられる。《utque iacens ripa deffere Caystrius ales dicitur ore suam deficiente necem, sic ego, Sarmaticas longe proiectus in oras, efficio tacitum ne mihi funus erat.》〔*Tristia*, V, I, 11~14〕

ソネ 17

宮廷の不運な人々がひしめきあって嘆いている
 あの岸辺を長い間さまよひ歩いたその後で、
 君は辿り着いた、誰もが求めるその場所に。
 貧困に身を縛られた辛い季節を逃れて。
 そういう間も我々はこの浜辺に並び
 つんぼの船頭⁽¹⁾ に空しく手をさしのべているが、
 船は我々をふりすてて遠く沖へと去っていく。
 早い話が船賃にあてる小銭もないからだ。
 かくして君は満ち足りた憩いの時を楽しんでいる。
 博学な恋人達⁽²⁾ がかの地でそうしているように、
 君は森の奥深く貴婦人と共に入っていく。
 君は忘却の水を飲み、かつての苦勞を忘れ去る。
 置きざりにした人々をもう思い出すこともない。
 港で叫ぶ人々を、あるいは船をこぐ人々を。

註

- (1) この船頭は冥府の川の渡し守カロンのことであろう。
- (2) 博学な *docte* という形容詞はミューズに冠せられるものである。博学な恋人達とはペトラルカ風恋愛詩を書く詩人とその詩に歌われて後世に名を伝えられる貴婦人を指している。またここで問題となっている場所は、神々に愛された人々が死後幸福な生活を送るというエリュシオンの野である。エリュシオンはローマの詩人達以来冥府にあるとされているが、冥府には死者がその水を飲んで現在の記憶を忘れる忘却の川レテがある。生きながらにして不滅の詩人となったロンサールはエリュシオンに遊びレテ川の水を飲むとデュ・ベレーは歌っているのである。尚ソネ16,

17, 19, 20はロンサールについて歌ったものである。

ソネ 18

私がここでしていることを (モレル⁽¹⁾ よ)知らないというのなら、
 私は恋などしていない。そういう類いは何にもだ。
 私は主人の気嫌をとる、いやそれ以上のこともする。
 何よりもまずお家大事と気にかけて。
 おお(と君は言うだろう)何という奇蹟か、
 デュ・ベレーが家事の雑務にいそしむとは。
 あまつさえ異国の言葉で詩をつくる⁽²⁾とは。
 これでは羊と狼の呉越同舟もありえよう。
 だから(モレルよ)快い詩をどこへでも
 私は伴に連れていく。これよりほかの気晴しは、
 こんなに楽しい骨折りで私を楽にはしてくれぬから。
 それでも君は言うだろう、もし分別があるのなら、
 老いぼれ馬には早い所暇を出してやるがいい、
 馬がいよいよひどくなり息もできなくならぬように。

註

- (1) Jean Morel d'Embrun (1511~1581)・アンリ二世の給仕頭ですぐれたユ^ニマニスト。
 (2) デュ・ベレーはかつて『擁護と顕揚』の中で、当時の人々がラテン語を書くことを非難して、それはフランス語を豊かにすることにはならないと言っているのである。これはプレイアード派の原則であった。(『擁護と顕揚』第二卷第十二章)

ソネ 19

君が神々しいカッサンドルを讃え、
 国王をそしてヘクトールの後裔⁽¹⁾を讃え、
 またわがフランスのネストル、モンモランシー⁽²⁾を讃え、
 そしてアンリの寵愛が君に注がれるその間、

私はひとりラテンの岸辺をさまよいながら、
 フランスを懐かしみ、さらにまた懐しむ、
 この上もなき宝と思う昔の友を。
 そしてわがアンジューの地の楽しき住いを。
 私は慕う、森を、黄金なす平野を、
 ぶどう畑を、庭園を、わが河⁽³⁾の横ぎる
 緑もえる牧場を。ここではそれとひきかえに、
 石ころだらけの尊大な小さな山があるばかり。
 報われぬ希望で私をここにつなぐものは、
 求めれば求めるほど手の届かないものなのだ。

註

- (1) ヘクトールの後裔とはロンサールの未完の叙事詩『フランシヤード』 *La Franciade* の主人公フランキユスで、フランスの建国者ということになっている。
- (2) Anne de Montmorency (1493~1567) フランスの元師。アンリ二世はことのほか信頼を寄せていた。1557年のサン・カンタンの敗北の事実上の責任者であるが、その後も尚アンリ二世から頼りにされていた。ギュイーズ公にその権力を奪われるのは先のことである。
- (3) ロアール河。

ソネ 20

幸せだ、死の後に名誉が続く人は。
 それにもまして幸せだ、不滅の名が、
 後世に始まるのではなく、
 死が魂を奪う前に始まる人は。
 君は（ロンサールよ）生きながらにして
 君にふさわしい不滅の名誉にあずかった。
 また死ぬ前に（滅多にない幸運だ）
 君の美德は妬みにうち勝った。
 はやりたて（ロンサールよ）勝利は君にある。

陛下の御寵愛が君の味方についたのだ。
 すでに君の宮には勝利の桂冠が飾られ、
 すでに群衆が君の囲りを取りかこむ。
 丈長の白衣を着けたトラキアの大司祭⁽¹⁾を
 とり巻いているあの精霊たちにも似て。

註

(1) オルペウス。

ソ ネ 21

かつて権勢をものともしなかった伯⁽¹⁾よ、
 君のデュ・ベレーはもう居ない。これはもう
 流れの上に身を屈めるただの切株だ。
 生きているのはほんのわずかの緑だけ。
 詩を書くことがあるにせよ、熱狂もなく書いている。
 私の心にふれたものをただ忠実に私は書く。
 良いも悪いも唇をついて出てくるままに。
 冷えた心の足どりと同じようにゆるやかな筆の運びで。
 それにひきかえあなた方は自然を描く画家⁽²⁾として、
 肖像画の粹にはとらわれぬ技を持ち、
 古代の人の最も見事な作品を範とする。
 この私はそんなに高い賞讃を望みはしない。
 あなた方の絵と並んだ私の肖像画は
 ミケランジェロと並んだジャネ⁽³⁾に等しい。

註

(1) Nicola Denisot (1515~1559). アナグラムによって Conte d'Alsinois と称する。詩人で画家。この第一詩行は語呂合せになっている。

≪*Conte, qui ne fis onc compte de la grandeur,*≫十六世紀には名前がその人の一面を表わすものと考えられていたから、こうした語呂合せが無意味な遊びと

は思われなかった。

- (2) *peintres de la nature*, 自然の画家はすなわち自然の詩人でもある。十六世紀の人が自然という時、それは目に映る具体的な自然物ではなく自然界を貫く本質ともいべきもので、古代の最もすぐれた芸術家にのみ啓示された深い秘密である。目にするものの写生ではなく古代の作品の模倣によってのみそれは到達できるものなのである。プレイアード派はアリストテレスの教義に従って芸術を自然の模倣（ミメシス）と考えたがそれはとりもなおさず古代人の模倣であった。デュ・ベレーは『擁護と顕揚』で古代人の模倣を勧めている。（第一巻第八章）
- (3) *François Clouet* (1515—1572) 父のジャン *Jean Clouet* と共に通称をジャネ *Janet* という。国王お抱えの肖像画家である。すでにソネ 1 の訳註でのべたように、デュ・ベレーはありのままを描く歴史に対して詩は虚構の下に深い真理を隠すものだと言っている。そして前者には肖像画家ジャネを、後者にはミケランジェロをあてはめているのである。「良いも悪いも唇をついて出てくるままに」「ただ忠実に」書いたこの作品は詩人の生活や体験した出来事をテーマとしている故に歴史—肖像画の系列に並ぶものである。しかし現代人の価値観をもってミケランジェロと今はほとんど忘れられているクルーエとの対比を考えることは危険であろう。当時クルーエは肖像画家として第一人者とみなされていたのであり、ここはあくまでもジャンルの上の優劣が問題となっているのである。デュ・ベレーはこの作品のジャンルを二流としながらそのジャンルの中では第一人者であることを自負していたように思われる。